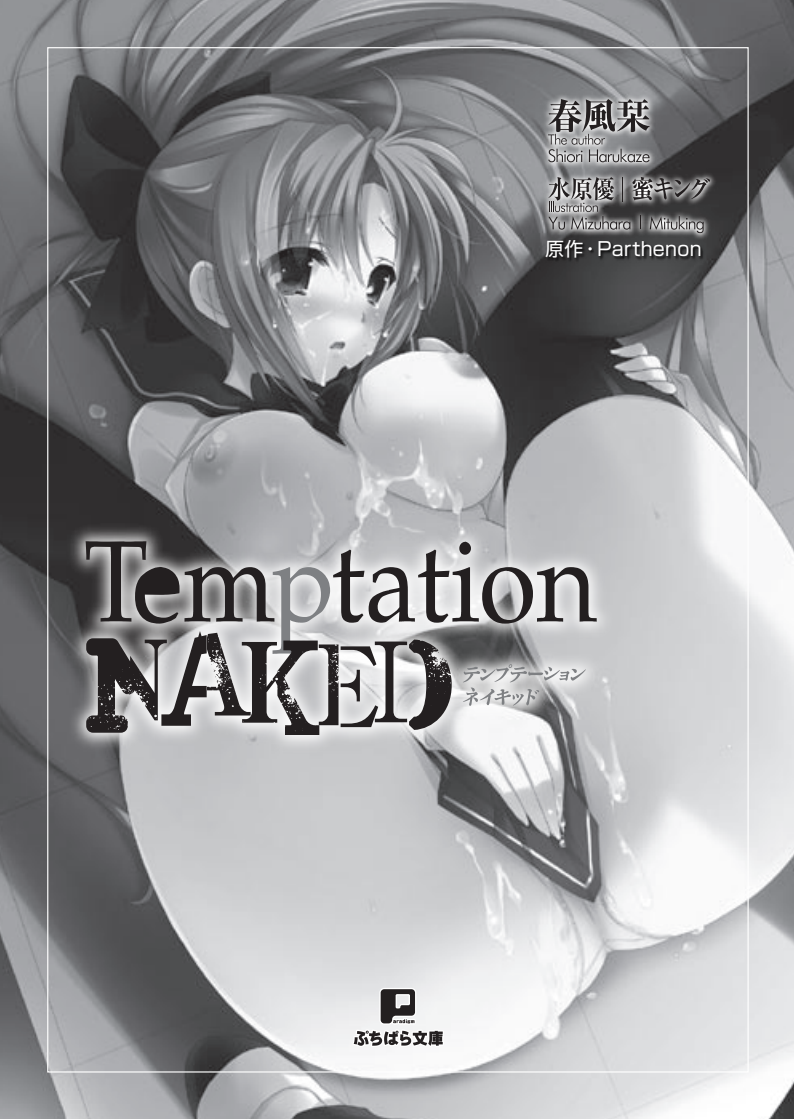




春風葉

The author
Shiori Harukaze

水原優 | 蜜キング

Illustration
Yu Mizuhara | Mituking

原作・Parthenon

Temptation NAKED

テンプテーション
ネイキッド



ぶちばら文庫



クラスメイトの誰もがオカズにしたことがあるような美少女を、
自分の思い通りに操る——本当にそんなことができるのだろうか。
気を落ち着けつつ、彩の姿をしつかりと網膜に焼き付けて、念を込める。
（……両足を広げる。そして、スカートを持ち上げて、俺に見せる——）

プロローグ	Behold	7
第一章	羞恥生活	13
第二章	美少女調教	45
第三章	処女喪失	67
第四章	快樂生活	86
第五章	変態雌犬娘	126
第六章	淫乱露出美少女	155
第七章	露出絶頂アイドル	189
エピローグ	最愛の淫乱雌奴隷	239

指先から伝わるヌルヌルした愛液に、オナニーを手伝っているこちらも高ぶってきてしまふ。こうしてオナニーを手伝うというのも、倒錯的で悪くない。

我ながら良いアイデアだった。

（さあ、心の中を覗いてみようか。今、彩はどう感じているのか、主人としてはしっかりと把握しておかないとな……）

写真に触れると、彩の今感じていることがたやすく分かった。

『す、すごい……き、気持ちいい……でも……ダメ……こんなこと、非常識……痴女よ、こんなことして喜ぶなんて……』

身体のはうは素直に感じてしまっているものの、どうやら心の奥底にはまだまだ抵抗があるらしい。

『わ、私はっ……ち、痴女なんかじゃ、ないんだからっ……し、しっかりしないと……こんなこと、早くやめて……』

さすがに、今まで築き上げられてきた人格を破壊するのは難しいらしい。

優等生である自分を、そう簡単に捨て去ることはできないのだろう。

そんな葛藤は、無駄だ。

嘲笑うように人差し指の爪で、ショーツ越しにクリトリスをリズムカルに擦って責める。

「きゃあ……あうん……うむ……！」



段々と高まってゆく快楽に、彩は顔を紅潮させた。

（さあ、自分からも腰を動かせ）

暗示によって、彩のほうからも指に合わせて腰を上下させはじめる。

「ひ、……ひゃあ……ああ……ひいあ……」

止めようとすればするほど、腰が淫らに動いてしまう。どんなに強く拒絶しようとしても、身体はいうことを聞いてはくれない。

言わば、意識だけある操り人形状態。

自分で動くことは決してできない。ただ、糸に操られるままに動かされるしかないのだ。

「ああ……んんむうう……ッ」

しかし、彩は唇を噛みしめて、漏れそうになった喘ぎを押し殺した。

まだまだ、理性が残っているらしい。

大きな声を出してしまったら、他の生徒に気付かれてしまうかもしれない。授業中とはいえ、誰がこないとも限らない。トイレの前に教室だつてあるのだ。

こんなところで、大きな喘ぎ声をあげてしまったら、教師が異変を察知してやってこないとも限らない。

『ああ、もしそんなことになったら私……絶対退学に……ううっ……』

それだけは絶対避けたい、と必死に思つて、彩は心の力を振り絞つて、喘ぎ声を押し殺していた。

「あ……ン……うん……う……んッ……あ……」

腰を動かしながらも、必死で声を抑える。そうやって耐えている姿が、剛斗の嗜虐心に火をつけた。

（フフフ、これを耐えられるかな？）

ショーツの上からでも解る程に、隆起してしまったクリトリスを、人差し指の先で強く弾いてみる。

「あひいっ！」

そのまま爪の先で、肉芽の頭を素早く、かつ激しく擦り上げると、彩は目を見開きながら、全身を総毛立たせるように震わせた。

「んはあっ！ あ、ああっ、ああああっ！」

縄に縛られた身体をガクガクと揺らして、軽く達してしまつたようだ。

『私……い、イっちゃつた……の？』

真つ白になった頭が、正気を取り戻してゆくにつれ、困惑とも罪悪感ともつかぬ感情が込み上げてくる。

学校で——しかも授業中なのに、男子トイレでオナニーをして達してしまうだなんて、到底、許されることではない。

「はあ……はあ……」

荒い呼吸をつきながらも、冷静さを取り戻そうとする。

しかし、そんな余裕を持たせるわけにはいかない。

「ひいっ！」

指先で更にクリトリスを責めると、彩は再び声を引きつらせた。

「だ、だめ……も、もう、らめえっ……い、イッたんだから……ああ、……今は、ゆ、許して……」

口の端から涎を垂らしながら、哀願する。

『やめて……こんなこと、しょ、正気じゃないわ……ああっ……夢よ、こんなこと……全部、ゆ、夢、なのよ……あああっ』

どうやら頭が現実についていけないらしい。

無理もない。

昨日まで学園のアイドルであり、優等生として、充実した学園生活を送っていたのだ。

剛斗とはほとんど話したこともない関係だった。

それが、こんな関係になるだなんて――。

理解の追いつかない頭と、今まで味わったことのない淫らな悦び。

頭の中は混乱の増々だった。

その反応ににやりと口元を歪めながら、剛斗は人差し指と親指でクリトリスを摘みながら、上下に動かした。

「あ……、ゆ……許してえ！」

――もうこれ以上されたら、どうかなってしまうかもしれない。

その恐怖に怯えながら、彩は我知らず腰を突き出していた。

「フフフ、身体は正直だな。校則違反の罰はまだまだ償えてないぞ……、もっと激しく、はしたなく……イッてもらおうか！」

「ああ、あひいいイイ！ あひイッ！」

「どんどん、充血して……尖って……彩のクリトリスがどんどん……敏感になつて……。いつもの二倍……三倍……五倍、いや……十倍激しく、快感を感じる性感帯になつて……！」

写真を握って暗示をかけると共に、わざと声を出して彩の官能を煽る。そして、指の動きを更に速める。

「ひ、ひいっ、あっひいひい……うん……あひいいひいっ！」

今までにない喘ぎ声を上げて、仰け反りながらも、本能的に腰を指に押し付けて小刻みに擦りつける。

『し、刺激強すぎるっ……！ いやあ、助けて……死んじゃう……こんなに強い刺激

……私……ひい……死ぬうっ!」

このまま彩の心を覗いていたらこちらまでイってしまいそうなほどの快楽だった。男の瞬間的な絶頂と違って、やはり女は継続的に感じるようだ。

あまりの快楽イメージに剛斗まで眩暈がして、思わず指が止まってしまふ。

「あ、あああ……きちゃう……学園で……ひとりい……えっちしてえ……ダメになっちゃう……すぐく、頭がおかしく……な、なる……だめ……らめなの……らめつ、に……なっひやううううううああつふうう!」

今までにない乱れかたをして、彩は全身をのたうち回らせた。

ギシギシという縄の音とともに、愛液と涎を派手に飛び散らせ、乳首をはつきりとわかるぐらいに固くさせる。

「い、イク……あああああ、ダメ……もう、がまんできない……あああ、イクっ……あああ、ダメ、身体の痙攣おさまらない……だ、だめ、だめえっ……あああああああ、あ、……いくいく……あつきやあああああああ……!」

縛られ、吊るされた身体をギシリと仰け反らせて、ピクンッ!ピクンッ!と痙攣させながら激しく絶頂を繰り返す。

「あああつつはあああああ……!」

強制快楽の断末魔を叫ぶと、かくり、とあたかも糸の切れた人形のように、動かなくな

つてしまふ。

紅潮した顔に涙を滲ませ、ぐったりと脱力するさまは、美しいものがあつた。

「あ……ああ……っ……はああ……」

肩で息をしながら、虚ろな瞳で床にこぼれた愛液を見つめる。

剛斗は内心にやりとしながら、彩の心身を自由にしてやった。

(これで終わりだと思ってもらっては困る)

剛斗は個室のドアを開くと、彩に視線でその先を見るように促した。

「……?」

そこには、様子を見に来た男子生徒が五人ほどいた。

剛斗も途中から気がついていたのだが、乱入しないように暗示をかけてそのままにしておいたわけだ。

『い、いやあっ……!?!』

心の中で悲鳴をあげて、彩の意識は薄れていった。

あまりの羞恥に気絶してしまったらしい。

「フフフ、ちよつとやりすぎたかな?」

学園のアイドル優等生には、少々刺激が強すぎたかもしれない。

剛斗は、デバガメしていた男子生徒に他言無用の暗示をかけて、解き放った。

気を失ったものの、彩の心は壊れなかった。

美城彩が本当にただの優等生であるならば、あるいはもう自我を失ってしまったかもしれない。それは、つまり――、

「彩には素質があるということだ」

淫らになりたいという願望、そして、人に見られたいという露出性癖。そういうものが彩の心の奥底にあるのだ。

「そうだろうか？」

空き教室。彩は目隠しをされて椅子に座らされていた。まるで催眠療法でも受けているかのようだ。

「そ、そんな……そんなことは、ありません……」

否定するも、剛斗の口からそう言われた瞬間、かあつと身体が熱くなってしまったのを感じていた。

『ち、違う……そ、そんなはず……ない……。私は、普通なもの……』

そう言い聞かせるものの、彩自身も絶対に違うとは言い切れない気がしていた。

学園アイドルとして皆に注目されることは決して嫌いじゃなかったし、優等生として振

舞って教師たちに受けがいいのも悪い気はしていない。

――だから、今の自分を、今の美城彩をずっと続けたい。

「違うな」

剛斗は彩の思考を冷たく否定した。

「それは、偽りの美城彩だ。本当の美城彩じゃない」

「そ、そんな……私は、私だもの……」

「そう思ってるのは君だけだ」

「えっ？」

彩は目隠しをしたまま、きょとした表情をした。

その姿を見ながら、剛斗は話を続けた。

「皆が彩を見ているのは間違いない。ただ、君をアイドルや優等生としてだけ見ているわけじゃない。皆、彩を性の対象として見ているんだ」

「そ、そんなっ!？」

「フフ、彩は世間知らずだな……。世の男どもは美しい雌を見ると、例外なくそういう目で見てしまうものだよ……」

そう言いながら、目隠しを外してやる。

目隠し姿もいいが、やはりこの端正で美しい顔は、見られるためにあるのだと思う。

「ほら、今日も胸で奉仕してもらおうか」
 すでにズボンから取り出していた肉棒を、顔の前に出す。

「……………」

しかし、まだまだ従順にすぐに奉仕を始めるというわけにはいかないようだ。

(さ、やるんだ)

「……は、はい。やらさせていただきます……」

暗示を使うと、すぐに従順な言葉が返ってくる。段々と暗示にかかりやすくなっているようだ。

早速、肉棒を乳房の間に挟みこむ。

目隠しだけで興奮していたのか、彩の柔肌はしつとりと濡れていた。

蕩けるような乳房の柔らかい感触に、肉棒が同化してしまいそうな錯覚を覚える。

「俺のペニスはどうか？」

「んああ……ああ……おちんちん、とてもたくましい……です」

胸を揺らして、いとおしげにペニスを包み込む。

その柔らかな感触は、自分の手でしごくより何十倍も気持ちが良い。この快感を知ってしまったらオナニーなんて出来なくなってしまう。

「ん……ああ……ああ……ん……」

胸の汗がローション代わりになって、段々と滑りがよくなっていく。

肉棒を挟むのが気持ちいいのか、彩の口からも甘い喘ぎがこぼれてしまうようだった。

先ほどの目隠ししながらの会話で、彩にも変化が起きつつあるのかもしれない。

(余興のつもりだったが、効果があったようだな)

「……ど、どうです……か？」

胸を動かしながら、そんなことを聞いてくる。今までならありえない反応だ。

「気持ちいいぞ……さすがは彩だな」

「あ、ありがとうございます……ん、しょ……ああ……本当に……剛斗くんのとつても大きくて……今にも、私の胸からこぼれてしまいそう……」

しかし、淫らかな台詞を言うにつれて、段々と優等生である彩の意識が甦りつつあった。

『えっ……、わ、私、……何してるの!? いや、だめ……汚い……汚いよっ!』

(やれやれ……さすがに学園一の優等生は、そう簡単に落ちないか……)

彩の心の動きを追いながら、更に強い暗示をかける。

「ん、んちゅ……ちゅば……ちゅる……んふ……ちゅばっ……」

鈴舌を舌と唇で刺激させ、胸で荒々しくしごかせる。

(でも、そうだな。行動はコントロールするが、心はそのままにしてみるか……。完全に操り人形というのも面白くないからな)

心を解放してやると、すぐに彩の感じている葛藤が頭に流れ込んでくる。

『きたないよ……ああ、きたないのに！ ああ、どんどん口の中、苦く……なつてきちゃう……どんどん、私、変になるう……ッ！』

しかし、現実の彩の動きや言動は、更に大胆になっていつている。このギャップが、またたまらない。

「ちゅる……んふう……ねばねばひてて……おいひい……ンッ……！」

どうやら、自らの行為に、興奮しはじめているようだ。押さえようとすればするほど、抑圧された性衝動が淫らな言動になって出てきてしまう。

「ちゅるる……チュパッ……んちゅ……じゅづづづづづ……ンンンッ……ちゅばっばあ……んふう……んちゅう……んつくううう……！」

もし今この瞬間、この空き教室に誰かが入ってきたら、彩が自ら望んで激しく奉仕しているようにしか見えないだろう。

「ちゅばあ……ちゅぶ……んうう……ううん……ちゅるる……チュパッ……ちゅぶ……んぐ……デュルッ……ジュブッ……んぐ、んぐ……うう！」

『どうして……いや、……なのに、こんなの絶対……気持ち悪い、だけなのに……ッ』

それでも、彩はペニスと牡液を口に含んで、胸で挟みながら感じてしまっているのだ。ショーツからはエッチな蜜が溢れてベトベトになり、今にも床に垂れてしまいそうだった。

た。

「ちゅぴっ……ぴちゅ、ぷちゅ……ちゅうう……んぐ……ちゅばあ……ばちゅっ……ちゅぶ……んぐう……んふう……くっふうう……ちゅぶ……ちゅぶ、ちゅば……ちゅるる……ちゅぶぶう……ンンッ……！」

恥ずかしげに膝をすりあわせながら、上半身を動かして奉仕を続ける。

「むぐ……んぢゅ、ちゅるる……ちゅば……ちゅぶうう……ちゅばあ……んく……んふうう……んちゅう……ッ！」

奉仕運動をするたびに、口内と胸の谷間からぐちゅぐちゅという粘液の混ざり合ういやらしい音が漏れ出る。

「くっ……」

『ああ、大きくなった……ああ、出るんだ……またあの白くいやなものを、私に出すんだ……ああ……！』

写真から伝わってくる彩の心は、間違いなく淫らになりつつあった。意識の奥では、剛斗の精液を受け入れようとしているのだ。

彩の艶かしい舌が、精液を迎えるように這って、くねる。豊胸を動かす両手も激しく上下する。精果から白いマグマのような精液がこみ上げてくるのがわかる。もう、堪えようのないぐらいの快楽だ。

「くっ、うああああ……出るっ……飲めよっ！」
頭を押さえ込んで、腰を突き出す。

「んぐうううっ！ ……んぐっ……ウウウン
ンンン！」

目に見えるぐらいに喉を動かして、彩は出された精液をそのまま飲み下してゆく。

「んぢゅ……ぢゅる……ぢゅば……んぐ……ん
うう……う……んぐ……ん……う……ん
ぐう……ぢゅる……ぢゅるるる……ッ」

呼吸が苦しくなるのも構わずに、瞳を潤ませながら、ネバネバした熱い精液を飲み干していった。

『ああ……私……精液飲んじやった……』

今自分がしてしまったことや、思ってしまったことを後悔しながら、精液を一滴残らず胃に入れてしまう。

『私、これからどうなっちゃうの……』

ぼんやりとした頭で考えるも、答えなど見つかるはずはなかった。

その夜。ビホルドの説明書を熟読していた剛斗は、充電している携帯に留守電メッセージが入っていることに気がついた。

「来たか」

初めての試みなので、うまくいくかわからなかったのだが。

携帯を手にとって、録音を再生してみる。

「はあ……うん……ああん……うん……うふっ……むう……ンッ……」

そこには、彩の淫らな喘ぎが録音されていた。

先ほど、『オナニーをしてその声を俺の携帯の留守電に吹き込め』と命じる念を送つてみたのだ。

「ンウウッ……！ も、もうよして……んっ、ああんっ！ わ、私の身体……これ以上、おかしくさせないで……え！」

必死に声を押し殺そうとしているものの、オナニーを止めることはできないらしい。しかし、まだまだ言動に抵抗の色がある。

せっかくの調教も、家に戻ってしまえば、いくらか後退してしまうのかもしれない。



ぷちばら文庫

Temptation Naked

2011年 7月29日 初版第1刷 発行

■著 者 春風菜
■イラスト 水原優・蜜キング (表紙)
■原 作 Parthenon

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©SHIRI HARUKAZE ©Parthenon

Printed in Japan 2011

PP022

Temptation

～催睡の奈落～



ぶちばら文庫02
春風葉 著
唯々月たすく 画
Parthenon 原作
定価 650円(税込)



好評発売中

Temptation 2

ぶちばら文庫02
春風菜 著
唯々月たすく 画
Parthenon 原作
定価 650円 (税込)



保健室の天使を救うには、
性感を操るしかない...

この催淫治療で!



好評発売中

ぷちぱら文庫は ライター&イラストレーターを募集中です!

「ぷちぱら文庫」シリーズを盛り上げる、新たな作家を募集いたします。「ぷちぱら文庫」は、ゲームノベライズだけでなく、オリジナル創作による美少女小説も刊行予定です。

応募規定は、それぞれ以下ようになります。

皆様のご応募をお待ちしております!

1. 募集内容

「ぷちぱら文庫」シリーズでは、美少女ゲームやライトノベルを好む読者層へ向けた作品作りを目指しています。ご応募いただく場合も、ヒロインの個性や魅力が伝わるようなもの、シチュエーションへのこだわりが感じられるものなど、はっきりしたテーマのある作品でお願いいたします。題材はとくに限定していません。発表済か、未発表作品かも問いません。

2. 送付方法

小説の場合は、テキストデータをメールでご応募ください。コミックやイラストは、原稿用紙をお送りいただいても、データをお送りいただいても結構です。データが5MB以上の場合は、ファイル転送サービスなどをご利用ください。コミックには枚数の規定はありません。小説は1ページを17行×40文字として、50ページ以上の作品をお送りください。

3. 選考結果などについて

メールでご応募いただいた場合は、着信のご連絡は必ず行っています。選考は随時行っており、締め切りはとくにございません。選考終了後、採用の方へのみ別途お返事をしております。通常はお返事までに、2週間～1か月ほどお時間がかかります。

4. 作品の送付先

ご郵送の場合は下記住所までお送りください。メールでのご応募は以下のアドレスで受け付けております。どちらの場合も必ず「お名前、年齢、ご職業、ご住所、電話番号」を書いた紙を同封するか、明記してください。
メールの宛先: desk@parabook.co.jp

〒166-0011 東京都杉並区梅里2-40-19 ワールドビル202
株式会社パラダイム 「ぷちぱら文庫作品応募」係

※ご応募の際の個人情報、選考結果のご連絡にのみ使用いたします。

作品のご返却を希望の場合は、宛名を書いた返信用封筒と切手を同封してください。